

アオノリ類は（葉状か千切状）植物餌料の中では最も嗜好される餌料の一つであろう。逆にハネモヤホンダワラ、サツマイモの葉は非嗜好性餌料であると結論される。

しかし、ティラピヤ類は、植物に限っても浮游性藻類及び附着性微細藻類から高等植物まで広範な種類の植物を摂取している。またアイゴ類の中にはホンダワラをかなり摂取するものもあると言われており、ティラピヤ類の下等藻類に対する選択性とアイゴの植物餌料選択性をさらに追究する必要があると考えられる。

2 ティラピヤ類とゴマアイゴの植物餌料給餌による成長実験

(1) 方法と材料

1トン容の不透明水槽（直方形 $0.7 \times 0.9 \times 1.8 \text{ m}^3$ ）を用い、飼育水量は 400ℓ とし、止水飼育である。通気はエアストーンを用い水槽の1ヶ所で行なった。

各餌料用供試藻植物は、図-2に示すように、実験水槽上部に差し渡した横木から、水槽底近くに懸垂されたクロスピンに適量を挟み、さらに錘をつけてできるだけ動かぬよう固定した。

供試藻はアオノリ (*Enteromorpha* sp)、アサオ類 (*Ulva* sp)、ヒビミドロの一種 (*Urothrix* sp)、植物プランクトン

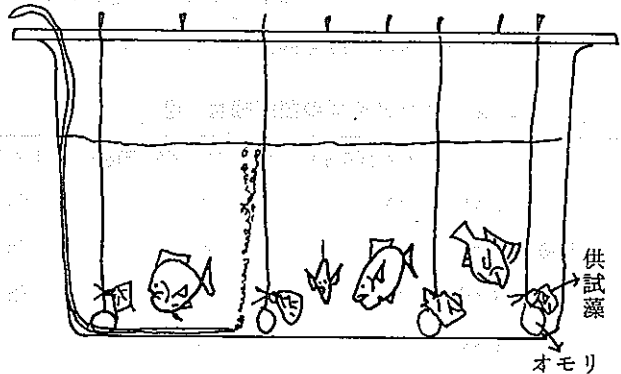


図-2 供試藻の給餌方法

（主として *Scenedesmus* sp, *Dactylococcopsis* sp）を用い、それぞれの試験においてはこれらの中から適宜取捨選択された。また対照区には配合餌料が用いられた。ヒビミドロは陰干しにより乾燥保存されたものであるが、残りの藻類は供試直前に採取されたものである。

植物プランクトンは屋外の1トン水槽にて、施肥培養したものから適宜補給された。試験期間中（植物プランクトンの試験6日～12日間）、全飼育水の交換によるプランクトンの補給を2～3回行なった。植物プランクトンの繁殖密度は $2 \times 10^6 \sim 2 \times 10^5 / \text{ml}$ のレベルであった。

供試魚は、供試前においては前記配合餌料により給餌飼育されていたもので、いずれも供試直前には24時間餌止めされた。

給餌回数は1日当たり1回とし、配合餌料区においては総魚体重の10%、藻類区においては30%量を目やすとして投餌したが、翌日の残餌量を勘案し（できるだけ餌が、わずかに残るように）加減した。給餌量は残餌量（投餌24時間後）を秤量し、投餌量より差引いた値とした。ただし配合飼料区では残餌量は差し引かれてなく、また植物プランクトン区においても1日に1回懸濁細胞数の計数を行ない、 $2 \times 10^5 / \text{ml}$ 以下の場合に全換水を行なった。

各試験水槽とも1日に1回、水槽底の排泄物はサイフォンにより除去された。

※ 配合飼料：河田飼料製いずみだい用C-2である。